

<論 説>

ケルンとブリュッセル—マルクスをめぐる二都物語

—(1) ケルンとブリュッセル—

的 場 昭 弘

目 次

はじめに

- 1 1840 年代までのケルン
 - i ナポレオン時代
 - ii プロイセン時代
- 2 1840 年代までのブリュッセル
- 3 1840 年代のケルンとブリュッセル
 - i ケルンとブリュッセル
 - ii ケルン
 - iii ブリュッセル
- 4 1848 年革命下のケルンとブリュッセル
 - i 48 年革命とブリュッセル
 - ii 48 年革命とケルン

小括

はじめに

ディケンズ (Dickens, Ch. 1812-1870) は、18 世紀革命期のロンドンとパリを舞台として『二都物語』(A Tale of two cities, 1859) を書いた。18 世紀はまさにフランス大革命の大舞台であり、パリとロンドンはその意味で好都合な題材であったともいえる。だからここであえて二都物語というならば、19 世紀のパリとロンドンを舞台にすべきであろう。しかし本稿はパリとロンドンではなく、ブリュッセルとケルンという比較的小さな都を舞台とする。しかし二つの都市は都といえるのかという疑問が出よう。

ブリュッセルは 1830 年にオランダから独立した新興国ベルギーの首都であるから、都という概念を首都の意味に解すれば何とか収まるだろう。しかし、ケルンはそれなりに大きな都市ではあるがプロイセンの一都市にすぎず、都というにはいささか貧弱にも見える。

確かに本稿の対象とする 1840 年代のケルンはプロイセンの飛び地ラインラントの一都市にすぎない。とはいえ、ケルンがラインラントの中核都市であったことは間違いない。しかも、ラインラントの他の主要都市アーヘン (Aachen)、コブレンツ (Koblenz)、デュッセルドルフ (Düsseldorf)、ボン (Bonn) に主要な役割を奪われたとはいえ、ライン河交易の中心であり、カトリックの巨大伽藍をかかえたケルンが、依然としてラインラントの中心都市であったことは間違いない。

い。そういう意味でケルンをラインラントの都として位置づけることにする。

ブリュッセルとケルンは、1840年代に奇妙な関係で結ばれる。ライン河の交易は、下流に位置するオランダが一手に掌握していた。ケルンはその独占から逃れるため、アントワープ (Antwerpen) の港への出口を求めた。もちろん、運河はない。アントワープとの交易は鉄道による輸送しかありえない。こうしたプロイセン側の要望とベルギー側の要望は、ケルン—アントワープ鉄道の建設という形で一致をみる。こうしてアントワープ—ブリュッセル—リエージュ (Liège) —アーヘン—ケルンを結ぶ鉄道が敷設され、ケルンはラインラントのみならずプロイセンそして全ドイツの経済発展の中心的と都市となる。

鉄道によって結ばれた二つの都市は、経済的な連携のみならず、政治運動でも重要な連携を持つ。両都市とも制限選挙はあったが、事実上市民の普通選挙は実現していなかった。選挙から排除されたプチ・ブルジョワジーは労働者と協力して選挙の制限を引き下げる運動を行う。それは二つの都市の民主協会という名の組織となって実現する。ブリュッセルとケルンは、1840年代、民主協会によって大きな結びつきを果たす。

本稿の主人公カール・マルクス (Karl Marx, 1818–1883)^①は、1842年から1843年にかけてケルンのブルジョワジーが発刊した『ライン新聞』の編集者であった。マルクスが『ライン新聞』時代に培ったケルンの人間関係は、1845年2月パリを追われ、ブリュッセルに住み着いたマルクスに大きな影響を与える。1848年3月にブリュッセルを追放されるまで、マルクスはブリュッセルの地で民主協会に参加し、ケルンの民主協会との連携を図った。

1840年代ケルンとブリュッセルは、ヨーロッパ民主運動の大きな中心地であった。ロンドンやパリの民主主義運動は、ブリュッセルを媒介として、ケルンへ流れ、1848年革命、すなわちドイツ、オーストリアの3月革命に深く影響を与えた。

本稿は、1840年代の民主主義運動の動きを、ブリュッセルとケルンという二つの都市に焦点をあてて分析する。もちろん、都市としての主人公はケルンとブリュッセルであるが、人物としての主人公はマルクスである。マルクスを中心とする社会運動を二つの都市の社会史との対比の上で描くことにする。

1. 1840年代までのケルン

i ナポレオン時代

ケルン^②はライン河左岸にあり、コブレンツ、アーヘン、トリーア (Trier) を含むライン河左岸の中心都市である。ライン河左岸地域は、1794年から1814年までフランスの支配下にあったことにその特色を持っている。1814年からラインラントはプロイセンとなるが、約20年にわたってフランスであったことがこの地域の人々に大きな影響を与えたことは否定しようがない。その影響とはフランス革命が与えた精神のことである。

ケルンという町が歴史上に登場するのは紀元50年のことである。ローマ皇帝ネロ (Nero 37–

68) の母アグリピナ (Agrippina 15-59) の生誕の町であったケルンは、ローマの植民都市としてコロニア・アグリピネンシウム (Colonia Agrippinensium) と名付けられる。アグリピナの植民 (Colonia) 都市という意味がそのままケルン (Köln, Cologne) という名前の起源となる。

やがて8世紀には大司教 (Erzbischof) が置かれ、大司教区 (Erzbistum) 都市として発展していく。12世紀になると、商業の発展とともにハンザ都市 (Hansestadt) の一員となる。

フランス革命軍は1794年10月9日ケルンに入場する [11, S. 43]。フランスが占領後行った政策は、本部 (Generaldirektion) をアーヘンに置き、ラインの中心都市 (Bezirksverwaltung) をボンと定め、ケルンをその下の一都市 (Municipalverwaltung) にすることであった。1797年10月17日フランスとオーストリア皇帝フランツ2世 (Franz II, 1768-1835) によるカンポ・フェルミオ (Campo Fermio) の条約によってフランス領となり、ラインラントは四つの地域 (レール Roer, ランとモーゼル, ザール (Saar), ドナースベルク (Donnersberg)) に分割された [11, p. 59]。

ケルンは、アーヘン (レールの中心都市), トリーア (ザールの中心都市), マインツ (Mainz=ドネルスベルクの中心都市), コブレンツ (ラインとモーゼルの中心都市) といった主要都市から区別された単なる一都市にすぎなくなったのである。しかも、大学も廃止されてしまい、ケルンの高等教育機関としては中央学校 (Zentralschule) 以外にはなくなってしまった。

1800年からはナポレオンの支配のもと県 (Département), 地区 (Arrondissement), 市町村 (Gemeinde) と区分され、ケルンには市長 (Maire) と2人の助役 (Adjunkten) が置かれることになった。市長はヤコブ・フォン・ヴィトゲンシュタイン (Jakob von Wittgenstein 1754-1823) であった。ナポレオンの5つの法典 (民法, 民事訴訟法, 商法, 刑法, 刑事訴訟法) がラインラントには導入され、裁判所はパリの最高裁を中心として、ラインラントの中心の裁判所はトリーアに、ケルンには地方裁判所が設置されたが、ここでもケルンは中心から離れることになった。ケルンがもっとも誇りにしていたのはカトリックの司教区の存在であったが、それも廃止されアーヘンに移管されることになる [11, S. 78]。

ケルンはこうしてフランス下で、それまでラインの中心都市として持っていたすべての特権 (行政区の中心, 裁判の中心, 教育の中心, 宗教の中心) をすべて剥奪されるにいたった。ライン左岸にとって、フランス支配は制度的には民主的思想の流入をもたらし、人々の関心を掴んだが、少なくともケルンに関しては、フランス時代は最悪の時代であったとも言える。経済的にもアーヘンや、クレフェルト (Krefeld) 地区ほど発展せず、唯一与えられた港湾権だけをたよりに商業の発展を願うだけであった。

ii プロイセン時代

1814年プロイセン領となったケルンもやはり、プロイセン政府によって重要な役割からはずされることになった。ラインの州都 (Rheinprovinz) はコブレンツ (1822年までケルンはユリヒ=クレーフェ=ベルク (Jülich-Kleve-Berg) 地区の州都であった), 州議会 (Provinziallandtag) はデュッセルド

ルフ (Düsseldorf) に決まった。ケルンは行政区の中心都市にはなったが、ラインの中心都市の自覚をもつケルンにとってそれは満足のいくものではなかった。だからケルンはプロイセンの支配をけっして喜んではいなかった [11, p. 127]。

ライン州議会は、いわゆる民主的に選ばれた議会ではない。身分制議会と言った方がよい。まず、選挙なく選ばれる領主階級 (Fürststand) が第1階級をなし、騎士領所有者 (Rittersgutsbesitzer) が第2階級、第3階級が都市 (Stadt) 代表、第4階級が農村 (Landgemeinde) 代表であった [11, p. 162]。選挙はそれぞれの階級内で行われた。もっともライン地域に限ってみると、ほとんど第1階級の領主階級は消滅しており、第2階級の騎士領所有者も事実上存在していなかった。ラインにおいては、事実上ブルジョワ階級が大土地所有者であり、州議会はブルジョワ階級が代表する場所となる。ケルンを代表する議員は、カンパハウゼン (Camphausen, L. 1803-1890) のような都市のブルジョワが占めていた。

こうした失望は、政治に限られたわけではなかった。大学設置という点に関しても、ボンに先手を取られてしまう。結局ケルンに割り当てられたのはライン控訴院 (Rheinischen Appellationsgerichtshof) だけであった。これはいわば高等裁判所にあたるわけであるが、このように司法における優越を確保するのが精一杯であった。しかし、法制度という観点からすると控訴院の設置はけっして悪い話ではなかった。プロイセン占領後、ドイツ一般法 (preußische Allgemeine Landrecht) が導入されたが、ライン地域にはナポレオン法典が残っており、ナポレオン法典の優越をプロイセンに対して主張しえる能力を持ち得たからである。ケルンがライン地域の民主主義運動の中心となりえたのはまさにこの点にあったといっても過言ではあるまい。

また、ケルンにとって決定的な意味を持ったのは、宗教であった。ケルンは再び大司教区の中心として復活した。プロイセン政府と真っ向から対立したのはケルンの大司教であった。1837年に起こるケルン教会闘争 (Kölner Wirren) はまさにその頂点を示す出来事である。

そもそも事の起こりはこうであった。カトリック教徒とプロテスタント教徒が結婚した場合の子供の宗教をめぐる問題、混合問題 (Mischenfrage) がことの発端であった。ラインのカトリックは混合婚の場合、カトリックへの洗礼を強制していたが、プロイセンでは父方の宗教で洗礼を受けることを旨としていた⁽³⁾。プロイセン併合後多くの青年官僚がラインラントへ赴任し、そこでラインラントの女性の結婚する可能性が高まってきた。そのため、プロイセン政府は1825年ラインラント、ヴェストファーレンにおいても父の宗教に従うように布令を勧告した。

ケルン大司教シュピーゲル (August von Spiegel 1764-1835) は、こうした命令に対して妥協的に従っていたが、彼の死後引き継いだ新しい司教クレメンス・アウクスト・フライハー・ドロステ・トゥー・フィシェリンク (Clemens August Freiherr Droste zu Vischering 1773-1845) は、こうしたプロイセンの命令をはねつけ、子供の教育をカトリックに任せるよう要求した。結局プロイセン政府は大司教ドロステを逮捕し、牢獄につなぐことになる。

問題は国家と宗教のどちらが優越するかということにあったが、結局国家の方に宗教が従属す

るという形になる。しかし、ことはそう単純ではない。ここで言う国家とは、民主的国家ではない。しかもラインラントはプロイセン人と同郷意識を感じているわけでもない。ラインラントの宗教問題は、ラインラントの独立精神の問題でもあった。だからこそ、プロイセンへの抵抗は、ラインラントを1848年革命の大きな中心地とする契機になった。

ケルンの民主運動を支えるもう一つの大きな力はブルジョワであった。ケルンは中世以来商業都市として発展してきた。ライン河の船舶交通と東西ドイツを結ぶ陸上交通の要衝としてのケルンは、商業立地としてもっとも適した条件を持っていた。

19世紀になって蒸気船の登場は、ケルンに新しい可能性をもたらした。流れの速いライン河をロッテルダムから4日で登ってくる蒸気船(Dampfschiff)は海洋貿易路としてのケルンの位置を一段と高めた。ただ蒸気船がオランダに独占されていたことによって、オランダ船に貿易を独占される危険があった。そのことが鉄道路線の普及を早めさせることになる。

ベルギーが1830年独立してまもなく、ケルンの商工会議所(Kölner Handelskammer)は、アントワープへの鉄道による新しい交通路の開拓に意欲を示した。『ライン新聞』と深い関係を持つことになる、カンプハウゼン、ハンゼマン(Hansemann, D. 1790-1864)などがアーヘン—ケルン間の鉄道計画の開拓に乗り出す。実際の鉄道の開通は1843年になった。当時植物園だったところにケルン中央駅が建設されたが、これは1892年に現在の姿に改築されている。しかし今も同じ場所にある[11, p. 185]。

鉄道建設に積極的な役割を果たしたのは、ケルンのブルジョワジーであった。ケルンと言え、ケルン水(Kölnische Wasser)(オーデコロン Eau de Cologne)で有名であるが、オーデコロンを除く産業としては、たばこ産業のデュモン(DuMont)とフォヴォー(Foveaux)、製糖業のヨエスト(Joest)などであった⁽⁴⁾。商業から見ると、カンプハウゼン商会、オッペンハイム(Oppenheim)銀行などがあった。彼らは、ライン州議会の議員でもあり、プロイセンに対抗する新聞『ライン新聞』の創設者ともなる。

1840年代までのケルンの市民は、プロイセンへの反抗心を内部に抱きながら、すこしずつ抵抗戦線の拡大をねらっていた。フランスとプロイセンによって剥奪された都市としての名誉を挽回すべく、市民の政治意識、宗教意識は異常な盛り上がりを見せる。それが、1840年代に展開するケルンの教会の尖塔(Dombau)建設計画であり、ケルン市議会選挙であり、『ライン新聞』の発刊であった。

2. 1840年代までのブリュッセル

ブリュッセルは1830年の革命によって、オランダから独立した国家ベルギーの首都となる。ブリュッセルという名の起源については諸説がある。セン川(la Senne)の谷間に広がるこの町は7世紀にブロセラ(Brosella)と呼ばれていたという[6, p. 7]。いずれにしろローマ都市ケルンに比べ新しい都市であった。中世都市として、ブラバント公、ブルゴーニュ公の都市として発展

し、スペイン領オランダの首都、ハプスブルク領となるという大国に翻弄される歴史の連続であった。

1789 年フランス革命は当然この都市の運命にも大きな刻印を残した。1792 年、11 月 14 日ケルンよりも 2 年早く、ブリュッセルはフランス革命軍の手に落ちた。フランス革命軍のデュムリエ (Dumouriez 1739-1823) 将軍は、ブラバントとフランドルをベルギー国として承認することを伝えた。

しかし 12 月この言葉はすべて取り消され、ブリュッセルはライン左岸へのフランス軍の侵攻のための収奪の場と化す。1793 年に一時オーストリア軍に占領され、オーストリアに復活するが、結局フランス革命軍の占領に戻り、フランスに合体させられた。ケルンと同じくブリュッセルにもフランス革命の成果は導入された。1799 年にはナポレオンに政権が変わり、1803 年 7 月 21 日ナポレオン (Napoleon, B. 1769-1821) とジョゼフィーヌ (Josephine, 1763-1814) がブリュッセルに入場した。

1814 年ナポレオンの敗退とともに、ブリュッセルからフランス軍がいなくなったが、結局ベルギーは独立を達成できず、オランダに支配されることになった。しかしブリュッセルは、ハーグ (Den Hague) と並んでオランダの首都となる。しかし、実質的にブリュッセルを支配したのは、オランダ語をしゃべるフランドル系ではなく、フランス系の人々であった。多くのフランスからの亡命者を含め、一般の人々と隔絶する形で、王宮近辺のブリュッセルの東の丘の貴族層はフランス語を話した [6, pp. 277-278]。

1830 年の独立後、ベルギーは立憲君主制をとった。国王にはルイ・フィリップ (Louisph: lippe 1773-1850) の息子、ヌムール公 (duc de Nemours 1814-1896) を選んだが、イギリスの反対によって、ザクセン＝コーブルクのレオポルド 1 世 (Leopld de Saxen-Coburg 1790-1865) に決まった。国王はブリュッセルに住んではいたが、実際にはブリュッセルはブルジョワの支配する自由な都市となった。ブリュッセルには、カトリックの色彩の強い大学に対抗して自由大学が 1834 年に設立された。

ベルギーはカトリック派と自由派との連合によって政治を行っていたが、次第に力は自由派へ移動していく。産業発展によるブルジョワジーの力の増大を特徴づけるものは、鉄道建設であった。1835 年最初の鉄道がブリュッセルに登場した。それ以降鉄道網はどんどん拡充し、1841 年には北駅が完成し、1843 年ケルンと鉄道によって結びつくことになった。

ベルギーでは、印紙税による出版の規制はあったものの検閲そのものはなかった。またフランスのような多額の抵当金を納めさせることもなかった。そのため、雑誌は急速に発展していった。1831 年に発刊された『アンデパンダンス・ベルジュ』(L'Indépendance Belge) は国際的評価を受けた [6, p. 317]。

1840 年代までのブリュッセルは、独立後の新しい息吹の中で、ポーランド人をはじめとする政治亡命者も受け入れていた。1840 年代にはその数はさらに増大し、パリと並ぶ亡命者たちの

中心都市となる⁽⁵⁾。

ブリュッセルは、フランス革命の洗礼を受け、ナポレオン法典の特権を受けた都市であったが、1830年以降はイギリス風の立憲君主制国の首都として、フランス以上に自由を謳歌できる環境にあった。フランスで出版できないものはブリュッセルで出版されるという状況であり、フランスからの亡命者も後を絶たなかった。

3. 1840年代のケルンとブリュッセル

i ケルンとブリュッセル

1843年に開通したアントワープとケルンを結ぶ鉄道は、ブリュッセルとケルンを密接に結びつける。河川による交通から見た場合、ケルンとブリュッセルとの交通はけっして好都合な位置にはなかった。ケルンの西のアイフェル (Eifel) の台地が交通を容易にさせなかった。しかし、鉄道交通の発展は、距離的には近いブリュッセルとケルンをより近いものにしていった。

1840年代のケルンの人口は6万人から8万人、ブリュッセルの人口は11万人から15万人であり、ブリュッセルの方が倍近い人口を抱えていた。総人口以上に大きな違いは、ブリュッセルには外国人が多くいたことである。その中でもドイツ人はとりわけ多くいた。プロイセンから追放されたドイツ人の多くは、パリかブリュッセルに亡命していた。特にブリュッセルとケルン間は鉄道の開通により日帰りも可能な状況になっていた。プロイセンから亡命したドイツ人は、国境の都市ヴェルヴィエ (Verviers)、そしてリエージュ、ブリュッセルへと移ってきていた。

その意味で、ブリュッセルでの動きはすぐさまケルンに伝えられたし、ブリュッセルからオーステンデ (Oostende)、そしてロンドンへという交通手段によって、ロンドンの動きもブリュッセル経由でケルンに伝えられた。やがて1846年にはパリとも鉄道で結ばれ、パリの動きも、ブリュッセル経由でケルンに伝えられた。ブリュッセルは、パリ、ロンドンといったもっとも先進的都市の動きをプロイセンのケルンに伝える役割をなしていた。そしてケルンは、ドイツにパリ、ロンドンの動きを伝える重要な役割を果たしていたのであった。

このロンドン、パリ、ブリュッセル、ケルンというコネクションこそ、1848年革命をヨーロッパ全土に広げるもっとも大きな役割を担ったコネクションであったともいえる。こうした運動の伝達には当然受け手として、ケルンのブルジョワ、プチブル、プロレタリアの運動の発展があったことも忘れてはならない。

1840年代のケルンは、反プロイセン運動として、『ライン新聞』、ケルン大聖堂の尖塔の建設計画、ライン市議会の選挙運動が盛り上がったが、それはパリ、ロンドン、ブリュッセルの社会運動と密接に連動していた。

1840年代のブリュッセルは、民主協会による選挙運動、フランドル独立運動が盛り上がり、そこにドイツ人、ポーランド人、フランス人、ロシア人亡命者などが合流し、大きな国際運動を生み出す気運を作っていた。もちろん、この国際運動は、パリやロンドンの同種の組織とも連動

しあい、一時的ではあるが国際的連帯運動の様相を示していたのであった。

ii ケルン

a 『ライン新聞』

1842年、ケルンのブルジョワは、新しい新聞を発刊した。その名は『ライン新聞』(*Die Rheinische Zeitung für Politik, Handel und Gewerbe* 1842-1843)。もともとケルンには、カトリック系の新聞『ケルン新聞』(*Die Kölnische Zeitung* 1801-1945)があった。

『ケルン新聞』⁽⁶⁾は、1763年にケルン『王立中央郵便局新聞』(*Reichsoberpostamtzeitung*)として発刊された歴史ある新聞であった。1801年に『ケルン新聞』の名称が変更され、1945年廃刊するまで約150年その名前で発刊され続けた[12, S. 41]。

『ケルン新聞』は1840年代カトリック保守派の新聞として購買部数を伸ばしていた。プロイセン政府は『ケルン新聞』に脅威を感じ、対抗する新聞の刊行を画策した。最初『ライニッシェ・アルゲマイネ新聞』(*Die Rheinische Allgemeine Zeitung*)が1840年に企画されたが、すぐに消滅する。こうしてプロイセン政府に対抗新聞として期待されたのが、『ライン新聞』であった。

『ライン新聞』はラインにブルジョワ、ユング(Jung, G. 814-1886)とオッペンハイム(Oppenheim, D. 1809-1889)、メヴィッセン(Mevissen, G. 815-1899)を中心として、株式会社として出発した。資本は3万ターレル、1株25ターレルで1200株発行された。新聞には9名からなる監査委員会が設置され、編集長の人選を行った[12, p. 49]。要請された編集長候補の中には、ラインのブルジョワに信頼のあったモーゼス・ヘス(Hess, M 1812-1875)さらにはフリードリヒ・リスト(List, Fr. 1789-1846)までいたが、結局2人とも承諾することはなかった。最終的にアウクスブルクの有力新聞『アウクスブルク・アルゲマイネ新聞』(*Augusburger Allgemeine Zeitung*, 1807-1929)の編集者、ヘフケン(Höfken, G. 1811-1889)に決まった。

しかし、ヘフケンは社主の意向と食い違ったため新聞を去り、マルクスの友人ルーテンベルク(Rutenberg, A. F. 1808-1869)が編集長の座に着く。ルーテンベルクは編集の一人にマルクスを呼ぶ(実質的には編集長であった)[3, p. 45]。ルーテンベルク自体も、プロイセン政府にマークされていたため、プロイセンはカトリックへの対抗新聞としての『ライン新聞』への期待を失うことになる。ルーテンベルクが去った後の『ライン新聞』は、名目上プロイセンに覚えのいいラーフェ(Rave, B. 1801-1869)なる人物を置いてはいたが、実質的にはマルクスの編集となった。

『ライン新聞』の特徴は海外からの最新のニュースを多く掲載したことにあった。海外からの寄稿者は、フランスのヘス、ローレンツ・シュタイン(Lorenz von Stein 1815-1890)、イギリスのエンゲルス(Engels, Fr. 1820-1895)、スイスのヘルヴェーク(Herwegh, G. 1817-1875)、ヴィルヘルム・シュルツ(Schulz, W. 1797-1860)、フレーベル(Fröbel J. 1805-1893)、ベルギーのクーランダー(Kuranda, I. 1881-1884)、そしてルーゲ(Ruge, A. 1803-1869)やブルノー・バウアー(Bruno Bauer 1809-1881)がいた。彼らは19世紀の思想史を彩る傑出した人々である。『ライン新聞』の執筆者が、当時の有望な論客であったことは偶然ではない。『ライン新聞』は自由主義者の新聞

であったからである。

しかし、実際には自由主義の新聞の領域を次第に越し始めていた。ラディカルな共和主義運動への傾斜が新聞へのプロイセンの監視を強めさせた。そうするとユングやオッペンハイムといったブルジョワたちも不安になってきた。

1842年創刊まもなく発禁処分が検討され始めるほどであった。結局新聞には1843年1月21日発禁処分の処置が下され、3月31日をもって新聞は廃刊することになる。

『ライン新聞』の意義は、ケルンのブルジョワが独自の思想を展開する場所をもったということにあった。プロイセン政府の意向を受けた新聞でもなく、かといってカトリックの意向を受けた新聞でもない、新しいタイプの新聞を模索したことにあった。新しいタイプの新聞とは、ラインのブルジョワの意向を受けた自由主義の新聞であるということであった。わずかな期間であったが、『ライン新聞』の存在は、ケルンのブルジョワに、ライン州議会への批判、貧困問題への認識、検閲問題への意識を植え付けることになった。このことが、1840年代に始まるラインブルジョワの政治意識の高揚、さらには労働者の意識の高揚をもたらした。

b ケルン大聖堂の尖塔建設

ケルン司教区はフランス時代、プロイセン時代と長い間、辛酸を嘗めてきた。プロイセン下ではケルン教会闘争によって司教が逮捕、拘禁されるという事態が起こっていた。ケルン大聖堂では、プロイセン政府への不満が高まっていた。

当時ケルン大聖堂には、現在ではケルンの町を象徴するあの有名な高い二つの尖塔が存在していなかった。ケルンを有名にする塔の完成は1880年のことである。中世に建設された教会は、尖塔が建設されないままで放置されていた。1816年プロイセン政府は、有名な建築家カール・フリードリヒ・シンケル (Schinkel, K. Fr. 1781-1841) に、大聖堂の尖塔の建築計画を打診した。その後たいした進展もなく進んでいったが、1840年プロイセン国王フリードリヒ・ヴィルヘルム4世 (1795-1861) がケルンを訪れた時、その期待は現実へと変わっていった。1842年、国王はケルン教会の建設計画を現実のものとした。

もちろん、ケルン大聖堂の尖塔計画は国王主導で始まったわけではなかった。かなり裕福なブルジョワからなるケルン大聖堂建設協会が立ち上げられ、ドイツや外国からの支援も受けられる体制ができていたからであった。

大聖堂建設のためにシンケルの弟子、エルンスト・ツヴィルナー (Zwirner, E. 1802-1861)、やがてその後を受けて、カール・フォイクテル (Voigtel, K. 1829-1902) が建築主任となり、ケルンの大聖堂は1880年にその偉容を見せる [11, pp. 208-209]。

ケルン大聖堂の建設は、90%がカトリック教徒というケルン市民の感情をいやがうえにも高めることになる。プロイセン政府の支援を仰いだものの、1ターレルを基準とした募金は大勢のケルン市民を動員し、プロイセンに対するケルン市民の独立心を作り出していく。

もちろん、ケルン大聖堂の建設は、プロイセンにとっても、ラインラントにとってもドイツ人としてアイデンティティーを確保する場でもあった。プロイセンの教会尖塔計画は、1840年のラインラントをめぐるフランスとの戦争の危機⁽⁷⁾に関連したものであった。

1840年フランスとの戦争が問題になったとき、フランス側は自然国境説を根拠に、ライン河の西をフランスの固有の領地であると主張していた。当然ライン河の左岸にあるケルン、ラインラントはフランスということになる。ラインラント人の反プロイセン意識が高じて、フランス側へ接近することを恐れたプロイセンが打った政策がケルン教会との融和政策だったとも言える。

ケルン市民はこうした政策の中で、ラインラントの独立性を主張すると同時に、一方反フランス意識を植え付けられることにもなる。しかし、全体としてフランス色は強く残っており、愛都心高揚のために作られた歌「コロネーズ」(Colognaise)より、フランスの革命歌「マルセイエーズ」(Marseillaise)の方が歌われていた。こうした複雑な意識が、プロイセン政府へのラインラントの独自の権利主張と、ドイツ統一という相矛盾する二重性を作り上げる。

c 市議会選挙 (Die Gemeinderatswahlen)

ケルン市民の権利意識を明確にしたのが、市議会選挙運動であった。『ライン新聞』で自己主張したブルジョワがよりはっきりとした主張を行ったのが、プロイセンにおける憲法制定を求めた1846年の市議会選挙であった。

その選挙で活躍するのは、フランツ・ラヴォー (Raveaux, Fr. 1810-1851) であった。ラヴォーという名前はケルンのタバコ会社の名前としても知られていた。1830年ベルギーの独立運動に参加し、フランスの外人部隊に参加しスペインに行く。1842年ケルンのカーニヴァルの指導を担当し、1844年「市民カーニヴァル」(Karneval) 主催した。ラヴォーという名前からわかるように、もともとフランス出身で、フランス軍のケルン侵攻のときに家族はケルンに移住していた [17, p. 126]。

カーニヴァルは1840年代の民主運動を知る重要な出来事であった⁽⁸⁾。表立った民衆運動は禁止されていたが、キリスト教の祭事と関連した行事は容認される傾向にあった。1844年のトリアの聖衣 (Heilige Rock) 巡礼 (Wallfahrt) などはその例であった [19, pp. 101-107]。ラインラント各地でカーニヴァル運動が盛んになったのはそんな事情があった。カーニヴァル運動は、民衆の自治運動と深く関係しており、状況次第ではプロイセン当局にとっては政治的発言の増大を引き起こしかねないものでもあった。ラヴォーは、「ケルン大聖堂建設協会」(Kölner Dombauverein) への参加とともに、「民主協会」(Demokratische Gesellschaft) を設立する。民主協会は、ブリュッセルをはじめとした民主協会と深く結びついていた。こうして、ラヴォーはブリュッセルのマルクス、エンゲルスと密接な関係を持つことになった。

1846年、ラヴォーはケルン市議会選挙の候補者となる。ラヴォーの出馬は、当局による民主派への警戒を生み出す。10月の選挙の前、8月3、4日に聖マルティン (St. Martin) の祭典の

とき、流血事件が起こる。流血の結果、多くの市民が負傷し、樽職人のシュパート (Spatz, A.) が亡くなった。こうして市民の軍や政府への非難は高まる⁽⁹⁾。抗議のための委員会にはラヴォーをはじめ、カール・デスター (D'Ester, C. 1813-1859) など1848年革命で活躍するメンバーが集結した。こうして市民防衛隊 (Bürgergarde) が設立された。

結局、こうした事件の影響を受けて、多くの支持を受けたラヴォーとカール・デスターが市議会の選挙区に勝利した。カール・デスターは1842年、社会問題を議論しあう市民団体「月曜会」(Montagkränzchen) のメンバーとなる。この会の中心メンバーは『ライン新聞』の関係者であった。そこでマルクスと知り合うようになった。デスターはケルン商工組合の中心人物として活躍していた [13, p. 150]。1845年からは、『ゲゼルシャフツシュピーゲル』(Der Gesellschaftsspiegel)、『ヴェストファーリシェ・ダンフボート』(Das Westphälische Dampfboot) と並ぶドイツの社会主義的新聞『アルゲマイネ・フォルクスブラート』(Das Allgemeine Volksblatt) を編集する。この編集には、モーゼス・ヘス、ハインリヒ・オットー・リューニンク (Lüning, H. O. 1818-1868) が参加している [13, p. 152]。デスターはこの新聞を使って、選挙運動に乗り出した。

1848年革命以前にケルン市議会に急進的民主派の議員が存在していたことが、3月革命の展開を有利にする。とりわけ、マルクスとエンゲルスは、ケルンの民主協会の選挙活動を支援し、革命にいたる過程をこう考えていた。まず第3階級として急進的ブルジョワジーが選挙に勝利する。その後、彼らが制限選挙を廃止し、普通選挙を実施する。そうして労働者階級が議会に進出し、議会を通じて革命を遂行すると。その模範こそ1846年の選挙であった。その選挙での勝利は、1848年革命におけるマルクスとエンゲルスの戦略を大きく決定することになった。なぜなら、彼らはフランクフルトの国民議会で普通選挙が実施されることを期待したからである。『共産党宣言』の第4章のドイツでの共産主義者の政策には、こうした二段階革命論が展開されている。

iii ブリュッセル

ケルンの状況とブリュッセルの状況はかなり違っていた。ケルンがプロイセンの厳しい政策の中でわずかながら民主運動の光を見出そうとした一方で、ブリュッセルは制限選挙ながら民主運動をそれなりに展開させていた。1840年代のブリュッセルの問題は、フランス語とフランドル語の対立の問題、すなわちフランドル問題、政治的にはカトリックと自由派との対立の問題であった。

a 言語問題

言語問題はオランダ支配の反動であった。オランダ支配への憎悪がフランス語の公用語化を促進したが、その後フランドル語復興の運動が起こってくる。フランドルとはブリュッセルを含む(ブリュッセルはフランス語圏(Wallonie)とフランドル語圏(Vlaanderen)に分かれるが)ベルギー西部地

域を意味する。都市としてはアントワープ、ヘント (Gent)、オーステンデ、ブリュッヘ (Brugge) などがある。そしてフランス語圏の中心としはリエージュ、ヴェルヴィエなどであった。

フランドル語の復興は、たんに言語運動ではなく、フランドル文化運動であった。1840 年フランドル主義者が提出した要求案は次のようであった。

- 1) フランドル地方においては、地域のコミュニケーションはフランドル語で行われる
- 2) フランドル地方の役人や雇用者は、フランドル語を認識し、この言語で処理する
- 3) フランドル語が当事者の言語であるとき、裁判所でも使われる
- 4) フランドルアカデミー、あるいは少なくともフランドル部門が、ブリュッセルの王立科学、文学アカデミーに設けられる
- 5) ヘント大学やそのほかの国立教育機関でフランス語と平等にフランドル語が用いられること [9, p. 38]

フランドル語運動がフランドルの文化復興運動である限りにおいて、それは反フランス運動でもあった。フランス文化、フランス経済、フランス政府、ブリュッセルに暮らすフランス貴族への批判は、フランス人憎悪につながっていく。それがベルギーとフランスとの関係を微妙なものにしていた。

フランドル語運動は、1840 年代における経済的貧困とも比例していた。フランドル地域の経済的遅れは深刻で、人々は貧困にあえいでいた。そのため政治的な運動としてのフランドル語運動は人々の関心を必ずしも得られたわけではない。むしろ、フランドル語運動の進展に大きく関係したのは経済問題であった。ベルギー経済はかなり進んでいたが、市場をめぐってフランスとの間に大きなトラブルを抱えていた。ベルギーのリンネルには北フランスのリンネル産業保護のため高い関税がかけられていた。フランスとの間にはやがて関税を引き下げる提携を結ぶが、フランスとの関係はつねにギクシャクしていた。そこでベルギーは新しい相手としてプロイセンへ触手を伸ばしていた。

反フランス政策は、ドイツ語に近いフランドル語に勢いをつけた。ケルンとブリュッセルを結ぶ鉄道は、プロイセンとブリュッセルの資本家とのつながりを作り上げた。それ以前にもドイツ系の資本家がベルギーに多くいたこともあり、プロイセンとの関係は 1840 年代どんどん発展していく。

フランドル語運動を支えたのはプロイセンへの接近だけではなかった。フランスから流れてきた社会主義思想、共産主義思想、フランスから追放された多くのドイツ人が大きな支持層になった。ポーランド独立運動への支援は 1840 年年代の民主主義者の大きな目標になるが、フランドル語運動もマイノリティーへの支持という側面からいえば、同じ運動の系譜にいた。フランドル

語運動への支持が社会主義者、民主主義者の中から得られたのは偶然ではない。

しかしインターナショナルな民主主義運動と民族主義的な運動との間には、マイノリティーへの支持という側面と、偏狭な民族主義への憎悪といった側面という微妙な問題がからんでいた。フランドル運動を支えた人々も参加した民主協会には、ベルギー人以外も多くいた。外国人とベルギー人との亀裂が大きくなるのは1848年革命を契機にしてのことである。

b. 民主協会 (Association Démocratique)

1840年代のベルギーの社会運動を象徴するのが民主協会の設立である。フランドル語運動、貧困に対する労働者の運動、民主派の運動を総合してまとめたのが民主協会であった。ケルンでは1846年に民主協会が設立されたが、こうした民主協会はイギリス (fraternal society 友愛協会) やフランス (民主協会) でも設立されていた。

ベルギーは独立後、君主制を望むグループと共和制を望むグループに分かれたが、結局君主制グループの勝利に終わった。民主協会の中心に立ったのは、共和制を望むグループであった。独立後一時フランスに亡命したデ・ポッター (De Potter, L. 1786–1859)、1830年代に友愛会という労働者組織を設立したカツ (Kats, J. 1804–1886)、ジョトラン (Jottrand, L. 1804–1877) によって民主協会は1847年11月7日にブリュッセルで設立された。

フランスからの亡命者であったフランス人メリネ (Mellinet, F. 1768–1852) 将軍が議長となり、副議長にはベルギー人ジョトランとドイツ人マルクス (すでにこの当時プロイセン国籍は失っていた) が座った。通訳を内部に抱えた組織はきわめて国際的であった。民主協会の主な課題は、フランドル民族運動の支援、ポーランド独立運動の支援であった。

当時ベルギーでも制限選挙が行われていたわけではない。民主協会の役割はベルギーで共和制を実現し、普通選挙を実現することでもあった。彼らの要求は、ケルンの民主協会の要求とよく似ていた。結社の自由、集会に自由、義務教育などの民主協会の要求は、1848年革命の際の民主主義者の要求テーマとなるものである。

ジョトランは『アントワープからライン諸国を通してジュノヴァ、スイス、サヴォア、ピエモンテ、マルセーユ、南西フランスを通して帰還』 (*D'Anvers à Gênes, par le pays rhénans, la Suisse, la Savoie et le Piémont, et retour par Marseille et le Sud-Est de la France*, 1854) [5, pp. 158–169] という書物を書いているが、それをみると、ライン諸国のような小国をベルギーのモデルと考え、政治形態はラテン的中央集権ではなく、ゲルマン的分権であると述べている。そして、その実現のためには小国同士の国際的連合が重要であると主張していた。

民主協会はまさにジョトランの主張を裏づけるかのように、国際的な人員で構成されていた。民主協会にいたドイツ人たちは、労働者協会という組織で結束した人々でもあった。そこに参加していたエンゲルス、ヴェールト (Weerth, G. 1822–1856)、ヴィルヘルム・ヴォルフ (Wilhelm Wolff 1809–1864)、フェルディナント・ヴォルフ (Ferdinand Wolff 1812–1895) はロンドン亡命後も

マルクスの仲間として生涯を終える面々であった。

4. 1848 年革命下のケルンとブリュッセル

i 1848 年革命とブリュッセル

1848 年革命の知らせは、2 月 24 日の日に鉄道によって届いた。それに呼応した人々が鉄道の駅や市庁舎広場などへ押し寄せた。「マルセイエーズ」が歌われ、革命の余波を受けてベルギーでも革命が起こるものと考えられた。ところが、ベルギーでは革命は起こらなかったのである。

退位の覚悟を公表した国王レオポルド 1 世の意表の行動によって、民衆の革命熱は冷めてしまった。民主協会は革命の知らせを受けて、市庁舎前でデモ行進をおこなった。しかし当局は民主協会、およびドイツ人亡命者への監視の目を光らせた。

民衆協会のデ・ポッターは 3 月 1 日パンフレット『何をなすべきか、もはやためらわずに行動すべし』[14] を書き、フランスと同様の暴力的な革命の必要性がないことを強調した。こうして彼は出版の自由、国民主権、集会の自由、結社の自由を認めてもらうことで、革命という急進的な方針を放棄する。

民主協会は革命的行動に出なかった。このことは民主協会の内容からいっても当然であったのかもしれない。ベルギー国王と政府に政治的譲歩を要求することで、革命の混乱を避けるというのがはじめから念頭にあった。

とはいえ、革命的事件がなかったわけではない。それはリスコン＝トゥ (Risquons-Tout) 村で 1848 年 3 月 29 日に起きた武装蜂起事件であった。この事件で民主協会のスピルトホールンをはじめ何人かが逮捕された。エンゲルスは『新ライン新聞』に「アントワープの死刑判決」という記事を 9 月 3 日掲載するが [7, p. 380-383], 17 名が死刑判決 (後に減刑) を受けた。そこでエンゲルスは民主協会が武装蜂起をするはずがないと書いたが、ジョトランはこの事件の弁護を打って出た⁽¹⁰⁾。

事件とは、フランス革命軍の力を受けた民主協会員が国境を越えてベルギー領へ侵入し、この村で蜂起を行ったというものであった。スピルトホールンは、ベルギーは王の廃位によって平和的に共和制を達成するはずであるというジョトランの命をフランスに届けに行っていた [2, p. 309] のであるが、予定通り共和制に移行しなかった政府から告発されたわけである。

革命後の騒動の最中、マルクスたち外国人も大きな被害を受けている。二月革命後外国人の政治活動家は監視された。ベルギー政府は、危険分子をベルギーから追放することによって、革命の危険を避ける処置に出る。革命後ロンドンにあった共産主義者同盟は本部を一時期ブリュッセルに移すが、それはかえって藪蛇であった。ベルギー当局はマルクスの監視を強め、マルクスを 3 月 4 日に逮捕する⁽¹¹⁾。

この逮捕については民主協会のジョトランが問題にした。やがてマルクスを逮捕した警察官の罷免という形で落ち着くが、問題は革命を必要としないほど自由なはずのベルギーが実際にはか

なり自由を制限しているということであった。

ベルギーにおける民主協会の運動は、結局革命を避けることによって共和制の実現を逸してしまうことになる。しかも民主協会は外国人への憎悪をむき出しにし始めた。とはいえ、革命の崩壊とともにフランスからヴィクトル・ユゴーやブルードンなどが亡命してくる比較的自由な風土ではあった。しかし、民主協会が要求していた普通選挙が実現されるのは19世紀後半にずれ込むし、かつてのように多くの亡命者を集める国際的都市ブリュッセルは消滅する。

ii 1848年革命とケルン

ブリュッセルが革命を拒否することによって、結局共和制を実現することができなかったのに対し、ケルンはどうであったのか。ケルンは二月革命に敏感に反応した。こうしてケルンはドイツで起こる三月革命におけるもっとも重要な都市になる。

メヴィッセンやカンブハウゼンといった人物を中央の政界に送っているというだけでなく、革命にとって重要な役割を果たす人物を多く排出することになる。フランツ・ラヴォー、カール・デスターといった市議会議員、マルクス、エンゲルスといったジャーナリストなど、48年革命運動に異彩を放つ人々がケルンにいた。

3月3日には革命の知らせを受けた民衆5000人が市庁舎へ押しかけ [16, p. 50], ゴットシャルク (Gottschalk, A. 1815–1849) やアネケ (Anneke, Fr. 1817–1882) が逮捕される。民衆の要求は、プロイセン政府へのさまざまな民主的要求として現れた。ドイツ統一、ドイツ議会の創設、憲法の制定、結社の自由、集会の自由、出版の自由などといった要求がそれであった。

革命の希望の頂点は8月13日から16日にかけて行われたケルン大聖堂の尖塔の起工式であった。このときプロイセン国王フリードリヒ4世がケルンを訪れる。このとき革命は慈悲深い国王による民主的改革への期待、ドイツ国家の統一への期待へと変貌していく。しかしこれは頂点であり、その後革命は衰退へと向かう。

少なくとも9月に迎えるプロイセン政府との緊張関係の時までは、比較的革命は順調に進んだ。民主協会を表面にして、労働者協会が設立された。労働者協会は、民主協会の運動と協力することで、議会制内における普通選挙の実現を図っていた。その意味で労働者協会は、労働者による革命へ進まず、ブルジョワの政治権力掌握を後ろから後押しをする方針をとっていた。ロンドンで結成された共産主義者同盟は、ケルンの労働者協会(4000人)の中核を占めてもいた。ブリュッセルに一時本部が移動した後、パリへ移動し、パリから大量のドイツ人が三月革命後ドイツへ帰国した後、ケルンにその本部が移っていた。

労働者協会、すなわち共産主義者同盟を代表する新聞が『新ライン新聞』*Die Neue Rheinische Zeitung*, 1848–1849であった。『新ライン新聞』の編集長となったマルクス、エンゲルスは、ケルン労働者協会のゴットシャルクやアネケと対立していた。この対立が、やがて共産主義者同盟の解散を引き起こす。そしてさらには1851年のケルン共産主義者裁判 (Der Kölner Kommunisten-

prozes) [21, 258-260] でのヴィリヒ (Willich, A. 1810-1878) 派との対立となって現れてくる。

9月25日ケルン市の市民軍はプロイセン軍と対立し、ケルンはバリケードに囲まれ、戒厳令状態となる。基本的理由は経済状態の悪化と民主改革の遅滞であった。民主協会と労働者協会を中心とする勢力はプロイセンからのラインの離脱も考えながら、徹底的に対立した。しかし、結局はプロイセン当局の軍門に下る。その後「税不払い運動」などを展開するが、結局革命の衰退と、プロイセン王政の復活を防ぐことはできなかった。

1849年5月18日『新ライン新聞』は廃刊に追い込まれ、革命的勢力は各地で次第に消滅し、バーデン周辺へと集結していく。やがてバーデン蜂起といわれる闘争を通じて、全ドイツから革命勢力は追放されることになる。こうしてドイツ三月革命は終わる。

結局革命は行われたが、結局反革命の中でプロイセン体制は復活した。ケルンにおける民主化は、ブリュッセル以上に遅れることになる。革命を推進した人物の多くはドイツを去り、イギリス、アメリカへの亡命を余儀なくされ、残った人々も裁判が待っていた。もはやケルンとブリュッセルをつなぐヨーロッパの革命運動は消滅してしまう。

小 括

本稿はブリュッセルとケルンを巡る約50年の歴史を足早に述べてきたが、これはこれから展開される二都物語の序説をなすにすぎない。二都物語の主たる背景は、1840年代の民主協会と民主主義運動である。民主協会運動は、労働者運動をその背後にもっており、その意味で民主協会運動とは共産主義運動でもあった。

ケルンにおける民主運動の始まりは、『ライン新聞』創設にある。『ライン新聞』に集まった人々の中から、1840年代の民主運動を支える人々が出てくる。もちろんその中の1人がマルクスである。『ライン新聞』の廃刊によって封殺された人々の中には海外に新しい可能性を求めるもの、プロイセンにとどまるものと2つに分かれる。

残ったものは、ケルンの市議会選挙を中心として民主運動を展開する。それはケルン民主協会の運動、ケルン労働者協会の運動、そして共産主義者同盟のケルン支部として発展していく。海外に亡命した人々は、ブリュッセル、パリ、ロンドンの民主協会運動、そして労働者協会、共産主義者同盟として展開していく。

それらの運動が結合するのが、1848年革命である。1848年革命運動は、民主協会運動と労働運動の蜜月の頂点でもあり、そして終焉でもある。『新ライン新聞』はその意味で結集した運動そのものを表している。『新ライン新聞』の崩壊は、そのまま民主協会運動と労働運動の結合の終焉でもあった。

その最後を飾るのがケルン共産主義者裁判である。ケルン、ブリュッセルはおろか、ロンドン、パリまで巻き込むこの騒ぎは、共産主義運動の民主運動とのつながりを徹底的に破壊してしまう。共産主義運動が民主運動に見た幻想が消えたことによって、共産主義運動は民主運動に

よって獲得できない社会を求めて独自の明確な目標を設定するようになるのである。

(本稿は、今後 (2)『ライン新聞』とマルクス、(3)ケルンとブリュッセルの民主協会、(4)共産主義者同盟、労働者協会、民主協会、(5)1848年革命、(6)『新ライン新聞』と民主協会、労働者協会 (7)ケルン共産主義者裁判と共産主義運動の変化、という順序で展開していく予定である。なお本連載稿は1995-1996年度のアムステルダム社会史国際研究所での在外研究の成果である)

注

- (1) 19世紀労働運動史に関する都市名、人物名、事項名などは、『新マルクス学事典』[18]の項目に掲載されているので参照。
- (2) ケルン市研究の代表的なものはゴットハイン [8] の浩瀚な書物である。ここではクライン [11] の研究を中心に、必要な限りゴットハインを利用することにする。とりわけ、1848年革命のケルンについてはゴットハインを使う。
- (3) ケルン教会闘争については拙著『トリーアの社会史』[19, pp. 187-188] を参照。
- (4) 他に有名なブランドとしてはワインのエンゲルス、コッホ、製菓業のエッシング、食料品のハイマンなどがあった [1, p. 29]。
- (5) ブリュッセルのドイツ人については、拙著『パリの中のマルクス』[20] の7章、8章『フランスの中のドイツ人』[21] 5章参照。
- (6) 『ケルン新聞』に関しては、ブーフハイムの『三月前期のライン自由主義における『ケルン新聞』の位置』[4] が基本的な文献である。
- (7) 1840年代の独仏危機に関しては、『パリの中のマルクス』[22] 1章、2章を参照。
- (8) カーニヴァルに関しては、トリーアのカーニヴァルの様子を参照 [19, pp. 10-110]。
- (9) この騒乱についてはフランツ・ラヴォー自身の詳しい書物がある [15]。
- (10) ジョトランはこの事件、とりわけスピルトホールンについて詳しい書物を書いている [10]。
- (11) マルクスの逮捕に関しては、拙著 [20] の7章参照。

引用文献 ([1, p. 1] の場合、引用文献1の1ページを指す)

- 1 Aycoberry, P., *Cologne entre Napoléon et Bismarck, la croissance d'une ville rhénane*, Paris, 1981.
- 2 Bertrand, Louis, *Histoire de la Démocratie et du Socialisme*, Tome 1, Bruxelles, 1906.
- 3 Billstein, H. und Obermann, K., *Marx in Köln*, Köln, 1983.
- 4 Buchheim, K., *Die Stellung der Kölnischen Zeitung im vormärzlichen rheinischen Liberalismus*, Köln, 1914.
- 5 Delhasse, F. *Ecrivains et hommes politiques de la Belgique*, Bruxelles, 1858.
- 6 Dumont, Georges-Henri, *Histoire de Bruxelles, Biographie d'une capitale*, Bruxelles, 1979.
- 7 Engels, Fr., Die Antwerpener Todesurteile 「アントワープの死刑判決」, 『マルクス＝エンゲルス全集』, 大月書店, 第5巻
- 8 Gotthein, E., *Die Stadt Cöln im ersten Jahrhundert unter Preussischer Herrschaft 1815 bis 1915*, Bd. 1, Cöln, 1916.
- 9 Gubin, E., *Bruxelles au XIXe siècle: Berceau d'un Flamingantisme démocratique (1840-1873)*, Bruxelles, 1979.
- 10 Jottrand, L., *Charles-Louis Spilthoorn, événement de 1848 en Belgique*, Bruxelles, 1872.
- 11 Klein, A., *Köln im 19 Jahrhundert. Von der Reichsstadt zur Grossstadt*, Köln, 1992.
- 12 Klutentreter, W., *Die Rheinische Zeitung von 1842/43*, Dortmund, 1966.

- 13 Koszyk, K., Carl d'Ester, *Rheinische Lebensbilder*, Köln, Bd. 11, 1988.
- 14 De Potter, *Que faut-il faire?, pas plus hesiter que s' agiter, mais agir*, Bruxelles, 1848.
- 15 Raveaux, F., *Kölner Ereignisse vom 3 und 4 August nebst ihren Folgen*, Mannheim, 1846.
- 16 Seyppel, M., *Die Demokratische Gesellschaft in Köln 1848/49*, Köln, 1991.
- 17 Seyppel, M., Franz Raveaux, *Rheinische Lebensbilder*, Köln, Bd. 11, 1988.
- 18 的場昭弘, 内田弘, 石塚正英, 柴田隆行編『新マルクス学事典』弘文堂, 2000 年
- 19 的場昭弘『トリーアの社会史』未来社, 1986 年
- 20 的場昭弘『パリの中のマルクス』御茶の水書房, 1995 年
- 21 的場昭弘『フランスの中のドイツ人』御茶の水書房, 1995 年
- 22 的場昭弘「ブリュッセルとマルクス」『都市と思想家』I, 法政大学出版局, 1996 年